

# モンゴル牧畜社会における家畜糞文化研究 —内モンゴル・シリングル盟の事例より—

包 海 岩

名古屋大学文学研究科 博士研究員

## 緒 言

モンゴル牧畜民は、五畜<sup>1</sup>といわれるウシ、ウマ、ラクダ、ヒツジ、ヤギを中心に飼育してきた。ロバやラバも飼育しているが、これらは五畜に入らない。これらの五畜は、モンゴル牧畜民の衣食住を支えてきた。そのため、五畜はモンゴル牧畜文化の基礎である。

五畜はモンゴル牧畜民の日常生活のさまざまな場面で利用されている。五畜の肉と乳は食糧となる。毛皮は、衣類と住居の原材料となる。家畜は衣食住に利用されるだけではなく、乗用、運搬、戦争などにも利用される。さらに、主要なのは畜糞の利用である。畜糞は家畜のさわめて重要な生産物であり、燃料となる。しかし、これまでのモンゴル牧畜文化研究について概観すると、主に家畜の肉、乳、毛皮について論じられてきた。畜糞文化についての研究は断片的なものが多く、詳しく研究はなされていない。

本研究では、畜糞が内モンゴルの牧畜社会でどのように利用され、どのような役割を果たしてきたのかを伝統的な牧畜文化が色濃く残っているシリングル盟の事例より明らかにすることを目的とする。

## 結 果

モンゴルにおいて、畜糞は暖房と調理の最重要燃料であるが、畜糞は燃料以外に医療文化、遊び文化、宗教文化にまで関わっていることが明らかになった。以下にその要点を述べる。

### 1. 畜糞の名称体系

シリングル盟のモンゴル牧畜民は、30以上におよぶ五畜の糞名称をもっている。季節や、家畜の成熟段階、

凍結、乾湿の状態などによって、さまざまな名称が形成されている。一部の語彙については、地域的差異が存在する。五畜の糞名称を大きく五畜共通の糞名称と五畜種固有の糞名称に分けられる。表1に示す通り、五畜共通の糞名称は9ある。五畜共通の糞名称は、糞の湿状態と粉状態になっている糞が前提となっている。五畜種固有の糞名称を表2に示した。五畜種固有糞名称は21ある。主に、糞の乾燥し個体状態になった糞が前提となっている。ウシの糞のみ凍結すると固有名称がつく。そして、畜糞の色を基にした糞名称が多く見られる。

### 2. 畜糞の燃料としての利用

上記で、紹介した五畜の糞は、主に燃料として利用される。五畜の乾燥糞は、家畜や排泄する季節などにより、火力、火持ちなどが大きく異なるため、燃料としての使用場面も違ってくる。

ウシの乾燥糞は、暖房、料理、乳製品加工、ウマの去勢、祭祀などに燃料として利用される。ウマの乾糞は、皮のなめし、狐をあぶり出す猟に使用される。ヒツジとヤギの乾糞は、暖房、井戸掘り、虫よけに燃料として利用されることがわかった。

### 3. 畜糞と医療文化

家畜の排泄された糞を利用してさまざまな病気やケガを治療する民間治療が古くから行われてきた。これらの畜糞による民間治療は、次の3つに分類することができる。①セブス治療、②湿糞治療、③乾糞治療である。

①反芻動物であるウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギなどの第一胃にある食べ草をモンゴル語でセブス (*sebesü*) という。セブス治療は、家畜を殺し、その胃袋の熱を人体に浸み込ませて病気を治療する一種の外部療法である。セブス治療には、主に婦人の子宮寒病、関節病、痛風などの治療がある。

②モンゴル牧畜民は排泄したばかりの動物糞をバー

<sup>1</sup> 五畜をモンゴル語でタブン・ホショー・マルという。原意は、5つの鼻づらの家畜である。ウシ、ウマ、ラクダをボタ・マル（大型家畜）、ヒツジ、ヤギをボグ・マル（小型家畜）という。

表1 五畜共通の糞名称

畜	状態	モンゴル語表記	カタカナ表記	意味
五畜	湿潤	1. <i>bayasu</i>	バース	動物の糞の総称、排泄したばかりの糞
		2. <i>čičay-a</i>	チチャガ	下痢をした時の糞
		3. <i>jungyay</i>	ジョンガグ	生まれたばかりの子畜の糞
	乾燥粉状	4. <i>qar-a jungyay</i>	ハラ・ジョンガグ	子畜の初乳をのむ以前の胎便
		5. <i>sir-a・Jungyay</i>	シラ・ジョンガグ	子畜の初乳を飲んだのちの糞
反芻家畜	湿潤	6. <i>qomuy</i>	ホモグ	砕かれた乾燥した糞
		7. <i>küke qomuy</i>	フヘ・ホモグ	時間の経った、乾燥し砕かれた糞
		8. <i>ötüg</i>	ウトウク	長年家畜に踏まれた糞の層
		9. <i>sebesü</i>	セブス	反すう動物の第一胃袋の食べ草

表2 五畜種固有の糞名称

畜	状態	モンゴル語表記	カタカナ表記	意味的解釈
ウシ	乾燥・個体	<i>aryal</i>	アルガル	乾燥糞
		<i>qar-a aryal</i>	ハラ・アルガル	春の乾燥糞
		<i>sarisun aryal</i>	サリソン・アルガル	初夏の乾燥糞
		<i>sir-a aryal</i>	シラ・アルガル	夏の半ばごろから秋末までの乾燥糞
		<i>čayan aryal</i>	チャガン・アルガル	初夏の乾燥糞が1年経ったもの
		<i>küke aryal</i>	フヘ・アルガル	1年以上経って極めて乾燥した糞
		<i>üjil aryal</i>	ウジル・アルガル	1年以上自然状態におかれて枯れた糞
		<i>ümüg aryal</i>	ウムグ・アルガル	冬の凍った糞が翌春に乾いたもの
		<i>sibayasu</i>	シバース	壁などに塗られた乾燥糞
	凍結・個体	<i>küldegüsü</i>	フルドス	冬の凍った糞
ウマ	乾燥・個体	<i>qomul</i>	ホモール	ウマヤラバ、ロバの四角形の乾燥糞
		<i>qar-a qomul</i>	ハラ・ホモール	ウマの冬の乾燥糞
		<i>sir-a qomul</i>	シラ・ホモール	ウマの秋の乾燥糞
		<i>küke qomul</i>	フヘ・ホモール	ウマの何年間経った、乾燥糞
ラクダ	乾燥・個体	<i>qoryul</i>	ホルゴル	丸い乾燥糞
		<i>aryal</i>	アルガル	ウシの乾燥糞に似ている糞
ヒツジ・ヤギ	乾燥・個体	<i>qoryul</i>	ホルゴル	ヒツジ、ヤギ、の丸い乾燥糞
		<i>körjüng</i>	フルジン	晩秋から初春にかけてヒツジ、ヤギに踏まれ、つぶされ、こねられた糞
		<i>küke körjüng</i>	フヘ・フルジン	数年経った、乾燥したフルジン
		<i>day</i>	ダグ	初春から晩秋にかけてヒツジ、ヤギに踏まれ、つぶされ、こねられた糞
		<i>sigeg</i>	シゲグ	ヒツジの尻尾に貼りついた糞

*qar-a*とは黒、*sir-a*とは黄、*čayan*とは白、*küke*とは青色である。*sarisun*とは皮のことを指すが、ここでうすっぺらな状態を指す。*üjil*とは水気がない、枯れているなどの意を表す。

スという。五畜のバースは以下の治療に用いられる。表3はバースの主な治療病名である。

③五畜の乾燥された糞には、それぞれの名称がついている。乾燥されたウシの糞はアルガルといい、乾燥されたウマの糞はホモールといい、乾燥されたヒツジ、ヤギ、ラクダの糞をホルゴルという。五畜全体の乾燥糞の粉状態になったものをホモグという。畜糞の焼却灰のことをウヌス (*ünesü*) という。畜糞の焼却煙をオター (*utay-a*) という。これらは以下の治療に用いられる (表4)。

モンゴル独特の風土がもたらす生活環境や生活習慣

表3 バース治療

家畜の糞	治療
ウシのバース	関節病
	腫れ
	痛風 (トライ/ <i>tulai</i> )
ウマのバース	イボの治療
	血下痢、吐血、鼻血
	腫れ、デキモノ
	古い傷
	毒蛇や毒虫に指された時
	狂犬病
	喉の乾く症状

表4 乾糞に関わる治療

治療薬	治療
ウマのホモール	止血
ヒツジのホモグ	痛風 (トライ/ <i>tulai</i> )
アルガルとホモールの灰	痛風や関節病
畜糞灰	傷口の消毒
ホルゴルの煙	寒病 ( <i>kzyiten u ebedcin</i> )
ホモールの煙	痛風 (トライ/ <i>tulai</i> )

などに起因する痛風、寒病、関節病などの治療に畜糞が主に利用されてきた。

#### 4. 畜糞と遊び文化

ことわざやなぞなど、詩などのことば遊びや子供運動遊びにも畜糞が利用されてきた。一例をあげてみる。

aq-a degiü yin qola sayin  
 aryal uusun u oyir-a sayin  
 兄と弟は 遠い程 仲が良い  
 アルガルと 水は 近い程 便利である。

このことわざでは、兄弟関係を取り上げている。兄弟は近くに住めば、何らかの折に思わぬトラブルを起こすことも考えられ、遠いところに住めば仲がよくなる。これをアルガルと水との対比表現であらわしている。

現代においても、畜糞に関わることば遊びは言語・伝統文化の教育・啓蒙の面で重要な役割を果たしている。

#### 5. 畜糞と宗教文化

畜糞と宗教文化について、畜糞とヒツジ糞占い、ウマの葬儀と畜糞、ラマ教と畜糞について調査を行った。

モンゴル牧畜社会における家畜を活かした占いの中で、ヒツジ糞占いは家畜を屠殺することなく、最も簡単に行われる占いである。モンゴル牧畜社会で幅広く行われてきた占いでもある。

モンゴル牧畜民は自分の愛馬・種ウマが死んだら葬儀を行う習慣がある。死んだウマの頭骸骨の穴にホモール(ウマの乾燥した糞)を詰めて、オボー<sup>2</sup>に祀る。ウマの頭蓋骨をおさめた山や丘をウマのオボーという。このようなオボーはモンゴル草原で多く点在する。モンゴル人はオボーを祀ることは「テングリ」(天)を祈ることに通じるものと考えている。

<sup>2</sup> オボーとは、神聖視された山または小高い丘や湖のほりに石、樹木等を円錐型に住み重ねた造形物のことである。毎年定期的に祭りが開催される。

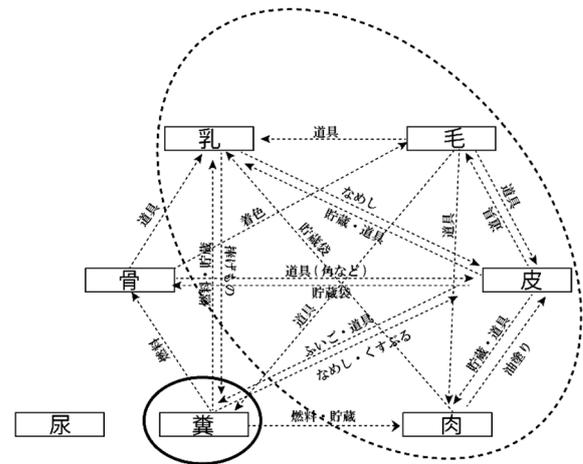


図1 五畜畜産物関連図

内モンゴルにラマ教が伝来してから、清朝時代に最盛期を迎えるが、そのラマ教寺院数は約1,800寺であった。シリング盟の寺院数は約273寺であった。これらの寺院は、移動をくりかえす遊牧社会では、①固定拠点としての機能、②流通の拠点、③学問の拠点、④医療機関、⑤経済活動拠点などの機能を果たしてきた。その寺院生活の維持において畜糞は燃料として重要な役割を果たした。以上から、畜糞はモンゴルの宗教文化と深く関わっていることが言える。

#### 考察とまとめ

畜糞の利用から以下のことが明らかとなった。畜糞はその他の畜産物とも深く関わっている。肉の調理と乳製品加工に畜糞燃料を利用する。冬に牛乳酒を壺に入れて、ヒツジやヤギのフルジンの中に埋めて貯蔵することができる。家畜の皮でフイゴを作り、畜糞燃料の火力をアップさせることができる。逆に畜糞の煙を用いて皮なめしができる。そして、家畜の皮を用いて畜糞採集に関わる民具を作ることもできる。つまり、図1のように畜産物の利用は相互利用関係にある。

畜糞は燃料として重要である。畜糞は燃料以外にも医療薬、遊び、占いなどのさまざまな利用方法がある。以上から畜糞文化はモンゴル牧畜社会の根幹を形成する一つの牧畜文化であると考えられる。

畜糞文化はモンゴル牧畜社会において極めて重要で独特な文化であるにもかかわらず文化項目として重視されてこなかった。畜糞の利用はモンゴル高原だけにとどまらず、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地域で広く利用されている。今後は、地域的な比較研究を進めることによ

り、畜糞文化論を構築することが期待できる。

### 謝 辞

本研究を遂行するにあたり、平成25年度公益財団法人三島海雲記念財団「学術研究奨励金」を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

### 研究成果

包 海岩「The culture of livestock dung in Mongolian pastoral society」、日本文化人類学会50周年記念国際研究大会、千葉市幕張メッセ、2014年5月15-18日。

### 文 献

- 1) 梅棹忠夫：梅棹忠夫著作集 第二巻 モンゴル研究，中央公論社，1990年。
- 2) 鯉淵信一：騎馬民族のこころ モンゴルの草原から，日本放送出版協会，1992年。
- 3) 小長谷有紀：モンゴル風物誌 ことわざに文化を読む，東京書籍，1992年。
- 4) 西川一三：探検と冒険，3, 302-312, 1972年。
- 5) 江口一久：ことば遊びの民族誌，pp. 284-293, 大修館書店，1990年。
- 6) 吉田順一：史滴，3, 64-86, 1985年。
- 7) デレゲル：モンゴル医学の世界，出帆新社，2005年。
- 8) Sampilnorbu: Mongyol un jang ayali yin toyimu, Liaoning-un ündüsten-ü keblel-tün qoriy\_a, 1990.